平成 30 年度　第 5 回意見交換会実施記録

1．実施結果

・開催日時　　平成 30 年 10 月 18 日（木）　19：00～21：00
・会　　場　　ラ･ホール富士 5 階研修室
・概　　要　　前回に引き続き森林環境創造ゾーン（ビオトープ）や屋外啓発ゾーンに関する回答と質疑と、「市民が主役」の施設を目指すために、「オープンに向けた活動について」意見交換を行った。
・出 席 者　　市民 12 名
　　事業者 7 人（3 社）、富士市職員 5 人、進行 1 人　　計 25 人
・進　　行　　坂本竜児（NPO 法人エコデザイン市民社会フォーラム スタッフ）

2．内容

（1）趣旨説明

・進行を担当している坂本が掲載されている雑誌を紹介した。経験談から、新しい取り組みを始めるときには、共に学びながらルールや文化を醸成することが必要だという説明があった。
・前回は時間が延長してしまった。また、ビオトープの回答ができなかった。今回は、しっかりと時間を取りビオトープの回答と質疑と「オープンに向けた活動について」の意見交換を行う。
・今回の会議の落としどころ（結論）は、「次の一歩」。準備事務局や分科会の日程を決めたい。

趣旨説明／掲載雑誌を紹介

（2）森林環境創造ゾーン（ビオトープ）と屋外啓発ゾーンの基本設計に関する意見交換

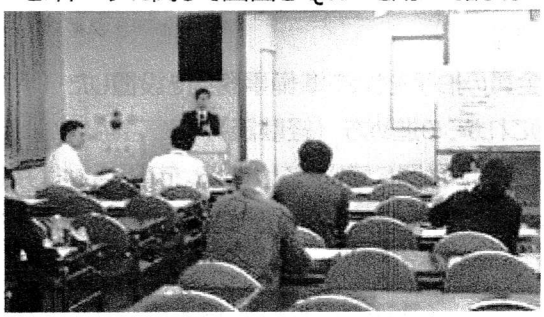
①市より補足説明

・常葉大学山田辰美名誉教授にアドバイスをいただいて設計している。前回、富士自然観察の会会長より意見をもらった（出席者がメールを代読）。同会長と電話で話をしたが、会員より情報提供を受けていること、意見は前回紹介した通りであること、現在多忙で打合せの時間が取れないが、状況は会員より確認するとの話があった。

ビオトープに関して図面と Q&A を用いて説明

②川崎重工より

※図面と Q&A（回答書）を用いて回答を行った。


質疑の様子

③質疑

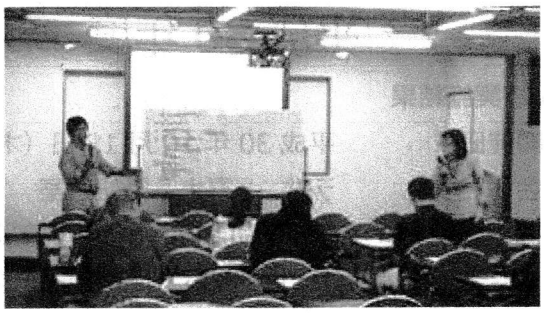
・今回の回答を受けて、質疑を行った。コンセプトや利用方法、植栽する植物の出所、昆虫や爬虫類の移動に関する質疑があった。参加者の 1 人からは、常葉大学の山田名誉教授と会った際に、山田名誉教授の意見が反映されていないという話があったことについて紹介があった。（※10 月 19 日に、あらためて山田名誉教授に説明し、内容について確認をしていただきました。）また、地元の方より、「素朴に緑のあるゾーンが欲しいと思って提案したが、ビオトープを作ることは難しいことだったんだ」と感想をいただいた。

（３）オープンに向けた活動について

①前回のふりかえり

・前回、みなさんのもやもやを共有し、すぐにすっきりするところを回答した。アンケートによるとすっきりしたという意見もあれば、この時間の意味が理解できないという意見もあった。前回の結論として準備事務局を設立したいという提案があった。

・今回の意見交換は、前回に引き続きオープンまでの活動について話し合いたい。また、準備事務局の動きやそれを受けてJVや富士市の考えを聞きたい。



第４回意見交換後の市民の動きを共有
（準備事務局で検討した結果を紹介）

②準備事務局の会合について

〔市民より〕

・10月２日（火）に、準備事務局を設置に向けた会議を行った。内容は、みなさんの参加動機と準備事務局の機能についてアイデアを出した。準備事務局に必要な機能をまとめ、適任者を選出した。今日、この場で承認していただければ、準備事務局として活動を進めていきたい（提案）。

〔進行より補足〕

・一般的に、市民団体を設立する場合は、解決したい課題に関心のある人が集まり、組織体制や事業計画について話し合い、活動を進めていく。今回は、富士市の呼びかけに応えて参加した方で上下関係ない中の集まりでここにいるみなさんの納得で設立するものと考える。準備事務局は本事務局が成立するまで連絡調整や意見集約を行う。

〔各セクターの意見〕

・富士市：参加されている方が合意して進めるもの。準備事務局を窓口とし、市民のみなさんと一緒になって取り組んでいきたい。

・JV：学習施設で行う備品等を相談してきたいので期待している。本事務局に向けて力を貸してほしい。

市、川崎重工、クリーン工房（指定管理優先交渉権者）の説明

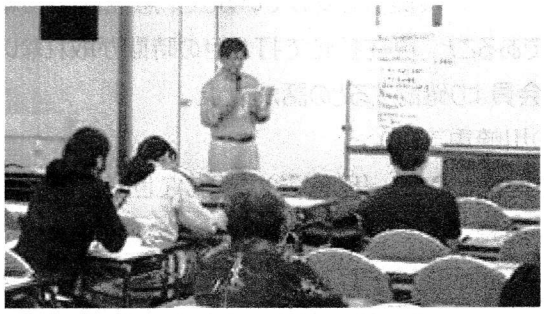
〔結論〕

・全員の拍手をもって準備事務局を設置した（承認）。

③これからの進め方（経験談）

・この間、疑問に感じたことがある。市民活動は共通認識が大事。仕事ではないし、いろいろな人がかかわるので気持ちよく活動を進めてもらいたい。

・事例１（共通の目標）：日本海でタンカーが座礁して重油が流出した事故を受けて、多くのボランティアが重油回収作業を行ったが地元からはボランティア中止の要請があった。理由は、ボランティアは都合のつく日だけで自由に活動できる。地元はよそから来た人が一生懸命やっているのに休むわけにはいかないと義務感。目的は海をきれいにしたいと同じことだが、立場が変われば印象も変わる。



書籍を引用して事例を説明

・事例２（文化の醸成）：かかわっている人は、みな社会での経験や我流。例えば、どんな議事録を作るかは各人で解釈が変わる。NGO運営の基礎知識には「どんな議事録を作るかはみなで決めればよい」と書かれている。テキストのようなものと照らし合わせて、みんなで納得する文化を醸成することが大切。

・事例３（学習施設と自分のかかわり）：環境教育施設をつくるという本もある。古いが事業者の業務と市民の言葉とのかかわり方が整理されている表がある。すでにある情報を参考に、共通理解を作りながら進めていくとよい。

④意見交換

・参加者から、分科会の開催や決まっていること、決まっていないことがわからないという意見があった。JVから納品する備品や運営のことを検討するにあたり、市民の意見を聞きたいという旨の説明があり、10 月 31 日に第 1 回目の分科会を開催することとなった。まずは施設の概要について説明をし、その後想定プログラムや必要な備品を決めていく。また、年度内（平成 31 年 3 月）までには備品は決定したいというスケジュールが説明された。

準備事務局を立候補したメンバーの決意表明

・今回の意見、分科会を踏まえ準備事務局を 11 月 8 日に開催する。準備事務局で一度分科会についてどうしていくかを相談する。分科会のテーマとして、プログラムや施設を知り備品を決める（JV 担当）、環境フェア（富士市）、エコット見学（坂本）、目的や理念、利用方法やかかわり方（クリーン工房）が考えられる。

・分科会も準備事務局も誰でも参加できる機会であることを確認した。

・最後に、準備事務局に立候補したメンバーから自己紹介と決意表明が行われた。

以上